

記念日を作ろう

4年前のこと

ご卒業おめでとうございます。ご列席の保護者の方々も、よろこばしいとともに、心の片隅ではほっとされ、解放されたという気持もあるのではないかとお察しします。皆さんの多くは、本日限りをもって学生生活に別れを告げるわけですが、どのような気持でこの日をお迎えになったのでしょうか。

学部卒業の皆さんは、4年前、2011年にこの大学に入学した人が多いと思います。この年は、言うまでもなく、入学式のほんの1か月前に東日本で大きな災害が起こった年です。東日本では、多くの大学で入学式そのものがとりやめになりました。そのような緊迫した雰囲気の中で、私たちは入学式を迎えたわけです。

あれから4年がたち、皆さんが卒業する年を迎えましたが、入学した2011年が震災の年であったのと呼応するかのように、卒業する今年、2015年は、阪神淡路大震災からちょうど20年がたった年ということになります。20年前には皆さんは全員生まれてはいたわけですが、まだ赤ん坊で、ほとんど何も覚えていない人も多いと思います。でも、きっと、神戸・阪神地区で育った方は、周りの大人から、いろいろと、20年前の大変だったころの話を聞いてきたと思います。

節目の年

今年は、また、1945年の戦争の終了から70年目の節目の年でもあります。戦争中のこととなると、それを直接知っている人が身の回りにいる人も少ないでしょうから、直接話を聞いたという人もあまりいないかもしれません。それでも、本やテレビなどから、間接的な知識をもっている人も多くいるでしょう。

戦後の日本は、今まで、平和であったと言ってよいと思いますが、つい最近も、海外で、日本人がテロリストの犠牲になっており、決してのほほんとして暮してはいけなような情勢だと言わざるを得ないと思います。

今日、3月20日は、西日本の大震災と同じ年、20年前に、東京でもう一つのテロリストによる、大事件が起こりました。地下鉄にサリンを撒くという、無謀な恐しい事件を起こした集団があり、多くの人が犠牲になりました。

こうして振り返ってみると、2015年というのはいろいろな意味での節目の年だということになりますが、悲しいことの節目ばかりなので、何だか嫌ですね。

そこで、代わりに、3月20日を自分だけの特別な記念日としてみてはどうでしょうか。もちろん、もともと、ここにいる皆さんにとって、大学を「卒業」した、あるいは、大学院を「修了」した、という記念日ではあるのですが、今日をきっかけに何か新しく始める記念日とするのです。

サラダ記念日

30年近く前、1987年のベストセラーに俵万智さんの『サラダ記念日』という歌集があります。本のタイトルは、その中の一首『「この味がいいね」と君が言ったから、7月6日はサラダ記念日』から来ています。これ、俵さんのTwitterでの書き込みによると、もともとは鳥のから揚げをほめられたという実話から来ているらしいのですが、「から揚げ記念日」では重すぎるからとサラダになったそうです。

それはともかく、日付も、7月7日の七夕の一日前の、何でもない日を、自分だけの特別な記念日にしようということを決めたそうです。

つまり、何の記念日であれ、そのきっかけは何でもいいということになります。3月20日というのも、明日の春分の日の一日前ではあるけれど、もともと何でもない日です。多分。(調べてみると、「電卓の日」だとか、つい最近事件のあったチュニジアの独立記念日とかではあるようですね。)

うちの大学では毎年この日に学位記授与式をすることになっているので、何か特別の日だという感じがしていますが、それはここにいる人たち、松蔭を卒業した人にしかわからない話です。そういう日にはありますが、今日は、誰にとっても、単に「学業が終わる」という以上の、大きな意味をもつ日にしてほしいと思います。

始める記念日

日本語の「卒業」という言葉は、何かが終わりにするというイメージがありますね。よくあるのは、芸能人がグループから抜けて、独立するときとかですが、芸能界からいなくなるわけではないので「引退」という言葉を使うのを避けているのでしょう。あと、アナウンサーなどが、テレビやラジオの自分の担当が終わるときも、担当最後の日に「卒業」と言ったりします。

皆さんも今日で大学生や大学院生でなくなる人が多いわけですから、一つの「終わり」と考えてもよいわけですが、では、明日からの自分は何なのだ、とも考えなくてはいけません。就職する人は「社会人」という新しい身分が自分に与えられるわけで、その意味では、「卒業」というのは、一つの新しいことの始まりでもあるわけです。決して人生を「引退」してしまうわけではないんですね。

英語で「卒業」は **graduation** と言います。これは、「段階」とか「程度」つまり、「グレード」(**grade**)を付けるということから来ていて、皆さんに今日は「学士」とか「修士」「博士」というグレードを付けて送り出すわけです。

ところがアメリカでは、「卒業式」に **graduation** という言葉を使いません。 **graduation ceremony** とか言わないんです。その代わりに使うのが、 **commencement** という言葉で、 **commence** というのは「始める」ということです。したがって、アメリカでは「卒業式」というのは、何か新しいことを始める式なんですね。

皆さんにとっても、今日、3月20日が、何か新しいことを始める記念日になるといいな、と思います。これから、まだまだ先の長い自分の一生の中で、今日という日をうまく位置付けてほしいと思います。どのように位置付けるかは自分で考えるしかないのですが。

「マイナー」の価値

そこで、そのためのヒントです。4年前後の期間をこの神戸というところで過ごしたということは、実は大変意義があることなんです。それは、神戸というのは、言ってしまえば「マイナー」な位置付けの都会だからです。

怒らないで聞いて下さいね。今の日本では、そもそも関西が関東に比べたらある意味「マイナー」です。ほんの150年前までは都は京都だったんですけどね。そして、神戸は、関西の中でも「マイナー」、大阪・京都に次ぐ3番手ということになります。

すみません。あえて、こんな言い方をしたのは、「マイナー」の反対の、「メジャー」というのはとてもつまらないことではないかと思っているからです。物事をすべて数量で序列化して、その一番でなくてはいけない、というのは、実はとても寂しい考え方で、人生の目的が、上に昇ることだけになってしまったような、やり切れなさを感じます。

関西に住んでいるわれわれは、京都・大阪・神戸のそれぞれによいところがあると思って暮しています。遊ぶにはどこそこ、働くにはどこそこ、住むにはどこそこ、という感じで、別にどれがどこと対応するかは言いませんけど、時と場合によって3つの都市を使い分けているんですね。たいていの人には、決して、3つの都市の中でどこが一番か、などとは考えません。

神戸の多様性

神戸は、歴史の長さでは京都に一步譲るかもしれませんが。経済の規模では大阪にかなわないでしょう。でも、神戸市内には京都市内について多くの大学があります。大阪市内よりも多いんですよ。あまり、京都のような「大学の街、学生の街」というイメージはなかったかもしれませんが。

そして京都市との大きなちがいは、山にも海にも恵まれているという、神戸市の自然です。京都府には海はありますが、京都市には海はありません。神戸市には、瀬戸内海ですけど、海があります。要するに、神戸には多様性があります。それは、自然だけでなく、文化面においても、中国系の南京街、西欧の異人館、旧居留地など、外国らしさが楽しめます。

これからの社会は、ますます、多様な生き方が共存していく社会になっていきます。若いうちから、いろいろな意味での多様性を経験したということは、将来、大きな意味をもってくると思います。

キリスト教の二面的性格

松蔭は、123年前にイギリスから来た宣教師たちによって作られたキリスト教主義の学校です。キリスト教の愛の精神を大事にして教育をおこなってきました。

先の「マイナー」、「メジャー」という言い方をすると、キリスト教は日本では「マイナー」です。人口の1%くらいしか信者がいないと言われていています。でも、世界的には30%以上の信者がいる「メジャー」な宗教です。その意味で、国際社会の中では、実質的な標準であり、普遍性の一つの形を代表していると言えるでしょう。

国際都市神戸という土地にふさわしい文化的な背景の中で育ち、日本の中で、決して多数派ではないという地位をしっかりと見すえながら、それでいて、普遍的かつ多角的な視点を

もつことができるのが、神戸であり、松蔭という学校なんです。「マイナー」ならでこそその強味として、より広い視野をもつことができます。物事を一面的でなく多面的に見ることができます。

女子大卒ということ

多様性ということに関しては、皆さんが、女子大卒であるということも大きな意味をもたらします。大学の中では勉強以外にも、サークルやボランティア活動など、いろいろな活動をしてきた人も多いと思います。ゼミ活動も含まれるでしょう。こういう活動は、これから出ていく社会の一つの小さなモデルという意味をもっていただきたいと思います。

ただ、一つの大きな違いは、実社会とは異なり、大学の中では、回りがすべて女子だったということです。皆さんの中には、グループの中でリーダーとして活躍してきた人もいると思います。そうでない人も、女子のリーダーをサポートするという経験をしてきたはずですよ。

性別に関係なく、一人一人の能力・個性だけで役割分担が決まるという状況は、今のような日本の社会では、今後、なかなか出会うこともないかもしれません。それでも、社会は少しずつ変わっていくのだ、そして、自分たちの力で、少しずつ変えていかなくてはいけないのだ、と、思って、生きていって下さい。

森を見ること

いろいろと話してきて、少し散漫な印象を与えてしまっているかもしれません。あと少しで終わります。

最後に、今日言いたかったことを一言でまとめてしまうと、物事を多面的に見ることのできる多様性を大事にしてほしいということです。目の前の、自分に関係することだけを見るのではなく、自分と異なるもの、対立するものにも目を配って、その上で、自分のあり方を見てほしいということです。

要するに「木を見るな、森を見よう」ということです。これは、つい先日、自分で作った標語ですが、「木を見て森を見ない」の裏返しですね。森全体を見れば、その中に、いろいろな形や色の葉っぱをつけた様々な木があることもわかるし、それぞれの木の枝の張り方の違いもわかる。そうすると、自分の目の前の木がどういう木なのかが、よりよくわかるのではないかと思います。

皆さん、もう一度、卒業おめでとう。これから皆さんがどんな森を見ることになるのか、その結果、今日をどのような記念日にするのか、楽しみにしています。